

# 携帯メールのやりとりは、どのように始まり、 どのように終わるのか

福田 倫子・永井 千絵

## How to start and end e-mails on the mobile phone

Michiko Fukuda・Chie Nagai

The aim of this study is to find out the characteristics of opening and closing in e-mail conversation on the mobile phone written in Japanese mainly by young people. 80 exchanges were examined. The results were as follows:

- (1) As for opening section, many exchanges have the mutual recognition between a sender and a receiver, however, some of them have the sudden introduction of a new topic with no appeal to the receiver.
- (2) As for closing section, some exchanges has no closing section because of the characteristics of e-mail on the mobile phone.
- (3) As for closing section, it is sometimes seen that the pre-closing or Leave-taking is disregarded.

### 1. はじめに

現代の日本では実に様々な種類のコミュニケーション・ツールを利用することができる。手紙、電話、ファックスはもとより、インターネットを利用したEメールやチャット、mixiをはじめとするソーシャル・ネットワークワーキング・サービス (Social Network Service, SNS) など多岐に渡る。

携帯メールのやりとりは、どのように始まり、どのように終わるのか

これらのコミュニケーション・ツールの中でも、飛躍的な普及を遂げているのが携帯電話であることは周知の事実であろう。そして、携帯電話を用いたコミュニケーションのうち、音声通話よりもメールの方が多いという報告がみられる。三宅（2001）では、大学生136名の調査で音声利用1日平均1.72回に対し、メールは1日平均9.98回であった。また、アイシェアrtypeリサーチ（2008）<sup>1</sup>では、20代から40代を中心とした調査の「今年最も利用した携帯電話の機能は」という問いに対する回答は、音声利用が21.1%であるのに対し、メールの利用は54.7%であった。このように携帯電話でのコミュニケーションは、音声通話よりもメールでのやりとりの方が活発に行われていることが分かる。

本研究では、このように日常のコミュニケーションに不可欠となりつつある携帯メールでのやりとりにおける、開始部と終結部に着目して分析・考察を行い、その実態や機能を明らかにすることを目的とする。なぜなら、従来の電話会話には開始部や終結部に特有の形式がみられているが、それでは音声会話に近いと言われる携帯メールでどのような変化が起こっているのかを考察するためである。また、実際に携帯メールを使用しているときにやりとりがなかなか終わらずに困った、という筆者らの経験も研究動機の一つである。

なお、本研究では携帯電話を使った電子メールを中村（2005）に従い、「携帯メール」と呼ぶ。

## 2. 携帯メール利用の背景

### 2-1. 携帯メール利用の状況

モバイル社会研究所の「ケータイ利用アンケート調査」（2008）<sup>2</sup>は10

<sup>1</sup> <http://japan.cnet.com/marketing/story/0,3800080523,20385697,00.htm>（10.01.30検索）

<sup>2</sup> [http://www.moba-ken.jp/research/research2008/r08\\_01](http://www.moba-ken.jp/research/research2008/r08_01)（10.01.30検索）

代から60代の1日当たりの携帯メールの送受信数を調査している。10代、20代では送受信とも10通を超え、60代でも送受信ともに2通以上あることから幅広い年代において、携帯メールが通信手段の一つとして定着しつつあることを示していると言える。

表1 年代別1日当たりの携帯メール送受信数

	1日当たりの携帯メール 送信数(単位:通)	1日当たりの携帯メール 受信数(単位:通)
10代	18.3	22.8
20代	13.1	17.6
30代	7.3	11.6
40代	8.5	12.3
50代	5.3	7.8
60代	2.4	2.9

次に、送受信数が多い若年層に関する、より詳細な調査結果を示す。内閣府の「第5回情報化社会と青少年に関する意識調査について(速報)」<sup>3</sup>(平成19年7月)は、全国の10～29歳の男女2,468名を対象とした調査を行っている(うち小学生319名、中学生451名、高校生396名)。「携帯電話等(PHSを含む)の使用状況」を見ると、小学生で31.3%、中学生57.6%、高校生96.0%が「利用している」と回答している。さらに、平成19年12月の「第5回情報化社会と青少年に関する意識調査について」<sup>1</sup>によると、1日に携帯電話等でメールを発信する回数は、中学生、高校生で男女を問わず「21回以上」が30%を超え(高校生女子は41.4%)、さらに1日に「51回以上」発信する比率は中学生男子で13.7%、高校生女子で13.5%にのぼる。

<sup>3</sup> <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/jouhou5/g.pdf> (10.01.25検索)

<sup>1</sup> <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/jouhou5/gaiyou.pdf> (10.01.25検索)

携帯メールのやりとりは、どのように始まり、どのように終わるのか

このように携帯電話の普及と携帯メールの利用頻度の高さは、複数の調査で裏付けられている。

## 2-2. 携帯メール利用の実態

2-1で示したように、携帯メールの利用は若年層で顕著にみられる。若者が携帯電話で形作る世界は、「フルタイム・インティメート・コミュニティ (full-time intimate community: 常時密接関係の共同体)」と表現されることがある(中島・姫野・吉井 1999)が、この傾向は携帯メールにおいてもみられるのだろうか。

### 2-2-1. 主要な携帯メールの相手

よく携帯メールをやりとりする相手は「普段よく会う友人」が最も多いことが先行研究および調査で報告されている(e.g; 三宅 2001; モバイル社会研究所 2005)。2位以下は各調査で結果が異なるが、「同居の家族」「普段あまり会わない友人」「恋人」「別居の家族」などが続く。

### 2-2-2. やりとりの内容

中村(2005)は、携帯メールのやりとりの内容を2つのタイプに分類している。約束などの道具的な利用と、身の回りの話題やその時の気持ちなど、おしゃべりのような内容でコミュニケーションそのものを目的とした利用である。前者が「道具的コミュニケーション」と呼ばれるのに対して、後者は「コンサマトリー (consummately: 自己充足的) なコミュニケーション」と呼ばれる。そして、田中(2001)の大学生を対象とした調査結果では、携帯メールでやりとりする内容は、①その場の出来事や気持ちの伝達(73.6%) ②事務連絡(66.7%) ③とくに用件のないおしゃべり(65.1%) ④質問(59.5%) ⑤相談(54.3%) ⑥緊急連絡

(49.6%) ⑦所在確認 (57.3%) ⑧予約・注文 (3.0%) ⑨その他 (0.7%) であった。①「出来事や気持ち」、③「おしゃべり」は特に緊急を要するものではなく、前述の分類のコンサマトリーなコミュニケーションに該当するだろう。また、⑤「相談」も道具的というよりはコミュニケーションを求めて行う活動だと考えられる。このような状況を、田中(2001)は、「[緊急連絡]や[所在確認]といった携帯の「役に立つ」機動性よりも「その場の気持ち」とを伝えるといったキブンの機動性が上位に位置している。「実況中継」化は進んできているといえるだろう。」と述べている。

### 2-2-3. 携帯メールを利用する若者の心理

それでは、若者はどのような心理でこのような携帯メールのやりとりをしているのだろうか。ここでは携帯メールの特性に起因する関係の促進と悪化について中村(2005)の説を示す。

中村(2005)によると、携帯メールには、面と向かうと言にくいような感情が言いやすくなる性質があり、その理由は、メールが表情や声色といったコミュニケーション上の手がかり(キュー)を欠いていることにある。この性質は、まだあまり親しくない者同士のコミュニケーションを促進するなどの効果もあるが、逆に、あまり親しくない関係で近づきすぎてしまい、かえって関係が悪化してしまう危険性もある。それは、キュー・レスであるがために、相手の反応が伝わりにくいことに起因する。そのような状況を回避するためか、若者の携帯メールでは「気遣いの作法」が注意深く行われる。すぐに返信したり、絵文字などのビジュアル表現を多用したりすることで、誤解を避けたり、表現をソフトにしたりし、双方が傷つくのを回避しているのである。

携帯メールのやりとりは、どのように始まり、どのように終わるのか

### 3. 携帯メールの特性

三宅（2005）は、携帯メールと音声通話のメディア特性を以下のような表にまとめている。

表2 携帯電話のメール、音声通話のメディア特性

	携帯メール	音声通話
① 方向性	一方向	双方向
② 着信	即時／ほぼ即時	即時
③ 送信	非同期	同期 <sup>5</sup>
④ 記録性	あり	なし
⑤ 距離感	あり	少ない
⑥ 密室性	強い	やや強い
⑦ 拘束性	なし	あり
⑧ 通信の長さ	短い	長い

三宅（2005）は、表2に基づいて、メールを利用する若者のコミュニケーションに関する考え方を次のようにまとめている。「相手との「直で」プライベートなつながりを大切にしたい（⑥）ので、自分の出したメッセージにはすぐに反応がほしい（②）。ただし、相手とのやり取りで自分に余裕がなくなるのは避けたい（余裕をもって自分を表現したい）（①③④）。それには、ある程度の距離感や断続感が必要であり（⑤⑧）、話を始めたり切ったりする自由も確保しておきたい（⑦）」。対面会話や音声通話との比較で、携帯メールは、会話のやり取りに関する精神的負担が少なくすむ、対人距離のとり方においても、距離感と親密感という、一見相反するような感覚を適度に保つことのできる空間であると述べている。

<sup>5</sup> 作動を時間的に一致させること。シンクロナイズ（広辞苑第5版）。

ここまで携帯メール利用の実態や特性、利用者の心理について述べてきた。携帯メールは音声通話と比較すると、発信側の自由度が比較的高く、对人的には距離感と親密感という、相反する感覚を適度に保つことができるコミュニケーション・ツールである。携帯メールを利用する若者は、普段よく会う友人に対して、コンサマトリーなコミュニケーションを目的とし、出来事や気持ちを「実況中継」している。その際、キュー・レスに起因する摩擦を回避するため「気遣いの作法」を注意深く行っている。次節では携帯メールのこのような特性や心理面から生じる、談話形式の特徴を明らかにするために、まずは電話会話（固定・携帯）の談話的特徴に関する先行研究を示す。

#### 4. 電話会話の開始部と終結部

ここでは、物理的な距離を持った会話である、電話会話の先行研究を示す。

##### 4-1. 開始部

###### ①電話会話の開始部

シュエグロフ（2003,pp376）は、例えば警察にかけられた電話を受け取る際の第一声である「警察です」などは、最初の発話ではあるが会話への最初の寄与ではなく、それ自体が反応であると述べている。呼び出し／応答連鎖の構造においては、情報量がより少ない側である受信者が最初に話す立場にあり、発信者が既に予想していたはずのことを追認するのである。

###### ②携帯電話会話の開始部

田中（2000）の大学生アンケートによると、携帯電話における発信者の開始表現には、「暇-?」「どこにいるの-?」などが用いられ、相手

と自分の確認がないという特徴を指摘している。一方、鶴田（2005）は、固定電話でみられるような正式な名乗りはないが、相互認識がなされていることを示している。携帯電話を固定電話と比較対照し、携帯電話が「個人性」「受け手とかけ手の特定性」「特定性に対する信頼」の3つの特徴を持つことから、携帯電話では、かけ手はほぼ間違いなく話をしたい人物に電話をかけることができ、受け手は電話を受ける前からかけ手を特定した状態で会話が始まることになる、という特徴を挙げつつも、会話の開始部でみられる、「○○ちゃん？」やニックネームでの呼びかけ、「もしもーし」というフォーマルな場面では使用されにくい呼びかけ、かけ手と受け手が声を合わせて発話する、などを相互認識の根拠として挙げている。

#### 4-2. 終結部

##### 4-2-1. 電話会話の終結部

###### (1) Schegloff & Sacks (1973)

エスノメソドロジーの手法を取り入れた、代表的な会話研究に Schegloff & Sacks (1973) がある。会話の終了に関する最初の問題は、「ともに会話を行っている者どうしが全員一緒に、ある話し手の発話が完了しても他の話し手の談話を引き起こさず、しかも、この発話の完了がある話し手の沈黙としても聞き取られることがないような [完了] 点に、到達するといったことは如何にして組織だてられているのであろうか」（北澤・西阪（訳）（1989））だとしている。

彼らは終結部の構造を Pre-closing と Closing の 2 つの部分に分けることを提案している。前者は、会話の参加者の一方が、「もうこれ以上話すことがない」との声明を出し、もう一方がそれに同意する部分であり、後者は Pre-closing の声明に同意が得られた時に、電話の参加者が最終

発話交換を行い、電話会話が終了される部分である（林 2002）。さらに、彼らは終結部に含まれる構造として「隣接対（adjacency pair）」という概念を用いている。隣接対の構造的な特徴は、①2つの発話からなり ②この構成成分としての2つの発話は隣接した位置に置かれ ③各々の発話をそれぞれ別々の話し手が生成する、の3点である。そして機能的な特徴は、隣接対の発話間には、「挨拶-挨拶」「提案-受諾/拒否」のような、別の場所ではあり得ないような親密な関係が形成されることである。この隣接対の直列的な配列により、会話の終了が可能になる。

(2) 岡本 (1990)

岡本 (1990) は、Closing sectionをPre-closingとLeave-takingの2つに大きく分け、Closing section開始のために機能する構成要素（「じゃ、そういうことで」「長くなると悪いから」など）をPre-closingの「方略」とし、それを受けて会話の終結を完了させるまで（「また、電話します」「御家族の方よろしく」など）をLeave-takingとした。Leave-takingは、別れによって2人の関係が損なわれるという可能性を「つくろう」、つまり「お互いの関係の再肯定」（Clark & French 1981）の機能をもつ。そして、Leave-takingとPre-closingの境界は曖昧であるとした。

岡本によるClosing sectionにおけるPre-closingの関係を図示すると以下のようなと考えられる。

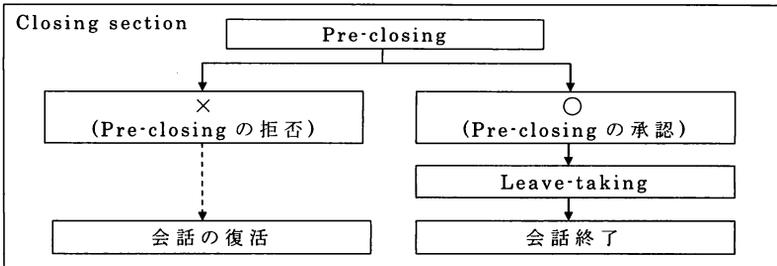


図1 Closing sectionにおけるPre-closingとLeave-takingの関係

携帯メールのやりとりは、どのように始まり、どのように終わるのか

以上のような先行研究をもとに、携帯メールのやりとりにおける開始部と終結部の調査方法を次節で、調査結果の分析・考察を次々節で述べる。

## 5. 方法

### 5-1. 調査協力者

大学生を中心とする成人で、男性17名、女性46名の計63名。メールのやりとりがあった間柄は、友人、親子、兄弟姉妹、先輩後輩、知人、交際相手、クラスメート、初対面など様々である。

### 5-2. 調査期間

提供されたメールのやりとりが実際に行われた期間は2006年～2008年で、やりとりの時間帯は、早朝、夜中など統一されていない。

### 5-3. 分析対象

やりとりの始めから終わりまでを1つのメールとし、80のメールを収集した。メールの総数と調査対象の人数が一致しないのは、複数のメールを提供した協力者があったためである。

## 6. 結果の分析と考察

### 6-1. 開始部分

携帯電話での会話において、田中（2000）は、相互認識がないことを指摘し、鶴田（2005）は、正式な名乗りはないが相互認識はなされると指摘している。会話に近いとされる携帯メールではどのように開始されるのだろうか。

80のメールの1ターン目のみを取りあげ、次のように分類した。

表3 携帯メールの開始部の機能と分類

	内容	メール数	比率 (%)
1	挨拶	21	26.3
2	名乗り	2	2.5
3	受信者の名前を呼ぶ	8	10.0
4	受信者の所在の確認	2	2.5
5	受信者への配慮	2	2.5
6	受信者の予定の確認	10	12.5
7	受信者への質問	14	17.5
8	受信者への依頼	3	3.8
9	報告	13	16.3
10	事前のやりとりが推測されるもの	4	5.0
11	その他	8	10.0

※1 「3. 受信者の名前を呼ぶ」に他の項目と重複するものがあるため、合計は80を超える。

※2 比率は80を100%として算出した。

最も多いのは「おはよう」「久しぶり」や「よ」「ちわ」などの言語的に簡略化されたものを含む「1. 挨拶」(21:26.3%)、次に「バイトからの電話来た?」「苺届いた?」などの「7. 受信者への質問」(14:17.5%)、続いて「テスト終わった」「米沢牛食ってきたぜ」などと「9. 報告」(13:16.3%)が続く。

鶴田(2005)が携帯電話の会話に関して指摘している「相互認識」には、ニックネームでの呼びかけ、フォーマルでない呼びかけ、唐突な話題の導入などが含まれている。本研究のデータでも、ニックネームでの呼びかけ(「○○ちゃん」「○○(敬称無し)」)、フォーマルでない呼びかけ(「よ」「ちわ」「はろー」など言語的に簡略化された挨拶)、唐突

な話題の導入（「今日自主練する？」など「6. 受信者の予定の確認」、  
「バイトからの電話来た？」「苺届いた？」など「7. 受信者への質問」、  
「△△のメールアドレス教えて」など「8. 受信者への依頼」、  
「テスト終わった」「米沢牛食ってきたぜ」など「9. 報告」）がみられる。これらは、相互認識ができていることを前提とした開始の仕方だと考えられる。特に「9. 報告」は受信者への働きかけの機能を持たない内容で開始される点で特徴的である。鶴田（2005）の携帯電話の会話においては、唐突な話題提供であっても「あんさ（あのさ）」「どこまで行ったの」といった受け手への働きかけの機能を持つ発話が見られた。携帯メールには相互認識はないとした田中（2000）で見られた唐突な話題提供も「暇ー？」「どこにいるのー？」など働きかけの機能をもったものであった。しかし、「9. 報告」は、働きかけの機能はなく、直接会って行う会話の一部分を切り取ったかのような様相を呈しており、携帯メールの開始部の特徴だと言えよう。

## 6-2. 終結部

先行研究から、電話会話における終結部はいくつかに分類できるが、岡本（1990）の日本語の会話ではPre-closingとLeave-takingに分けられる。日本語の電話会話の終結部の分類には小野寺（1992）もあるが、分析の結果、携帯メールには小野寺（1992）が述べているような人間関係再確認の部分、つまり謝りの発話の繰り返しが見られないことから、岡本の分類に基づいて考察する。本研究でメールの終結部を分析したところ、Pre-closing、Leave-takingも無く唐突に終わるもの、また一方がPre-closingを呈しても無視されるもの等が見られた。

例示した携帯メールは誤字脱字があった場合にも原文のまま掲載している。なお、絵文字を転載したURLは引用資料を参照されたい。

### 6-2-1. Pre-closing、Leave-takingともに無いメール

Pre-closingもLeave-takingも無いメール数は14であった。その終結の仕方はさらに2つのタイプに分類される。1つは、送信者が欲しかった情報が入手できた時点で突然終了するタイプ、もう1つは雑談が長く続いた後、突然終了するタイプである。

#### (1) 情報入手後に突然終了するタイプ

例1：(A=送信者 B=受信者、以下同様)

A：合宿何持って行けばいいのかな (?!?) 去年はあったかかった (涼)??

B：去年はTシャツ、スパッツで練習してたけど、一応ロンTは持っていったほうがいいと思うよ (皆)」

A：そっか (皆皆) 私服は持ってくる? ?てか、集合は私服なのかな (?!?)

あとお金はどんぐらい持ってくる? ?

B：飛行機のるし、飲みもあるから私服は持って行くよ (全) お金は昼食代とドリンク代、あとはお土産代とか買えるくらいは持っていったほうがいいかな?

例1では、送信者Aが合宿に持って行く物を尋ね、受信者Bが答えている。必要な情報が入手できた時点で送信者Aは受信者Bへの返信を中止している。

#### 例2

A：明日って8時くらいに浦和で大丈夫!?

B：Aちゃん、大変なことになりやした。明日バイト入っちゃって少し遅れるかも。てか、〇〇のアドレス△△じゃない!?

携帯メールのやりとりは、どのように始まり、どのように終わるのか

A：少してどんくらい！？〇〇の間違って前に送っちゃった

B：店長には早くあげてくれて言ったから忙しくなくなったら9時くらいにはあげてもらえると思うんだけど…何時までって決まってるからさ。ご飯食べに行くの！？

例2では送信者が集合時間と受信者の予定を確認し、受信者がどのくらい遅刻するかを答えている。受信者が最後のターンの最終文で質問をしているにもかかわらず、送信者は自分が欲しい情報が入手できた時点でやりとりを終了している。

例1も例2も最後のターンで雑談が始まろうとしたが、道具的な利用が発信者の目的であったためにpre-closingの兆しも見えないまま突然終了している。

## (2) 雑談後に突然終了するタイプ

### 例3

(前略)

A：こんなクソ暑いのに勉強したくね～(ニ3)

B：明日あたりにプールにでも行こうかと思います(㊄)もうテスト終わったの？

A：うん(ふ)行ってきな～～(㊄㊄)てか今日プール行ってたら最高だったな～(㊄)めちゃくちゃ暑かったし(↑↑)まだ終わってないよ(↘?)もう終わったん？

B：今日はやばかった(㊄)テストは終わったよ(㊄)あとはレポート1つだけ(㊄)

A：ね～今日やばかったんね(ニ3)歩いて学校行っただけで息切れしたし(??㊄)まじか～～いいなあ(↑↑)早く遊びたいわあ～～

(きょ) てか海とかいくん？

B：海は行かないですね (あ) もう6年位行ってない (あ)

例3では、発信者Aの最後のターンで海について受信者Bに問いかけを行い、受信者Bは最後のターンで質問に答え、さらに海に関する自分の情報を述べているにもかかわらず、発信者Aは返信を行っていない。このパターンは(1)の情報入手後に終了するパターンに類似しているとも言えるが、海に関する情報は雑談からの流れで発信者Aから提起した話題であり、発信者がやりとりを開始した目的ではない点で異なっている。

#### 6-2-2. Pre-closingまたはLeave-takingを無視したメール

ここでは、送信者か受信者のいずれかがPre-closingやLeave-takingを行なったにもかかわらず相手から無視され、やりとりが続いたものを分析する。

#### 例4

A：よ (あ) 明日何時に競技場行く？

B：〇〇君に荷物番頼まれてるから始発かな (きょ) 7時に△△着く予定 (あ)

A：補助員が8時集合らしく、道に自信がないので誰かいないかなあと思って (きょ) ありがとう (あ) <Pre-closing>

B：そうなんだよね (あ) 朝早くからごめんね (きょ) 〇〇も頼まれたみたいだったよ (あ) <Pre-closing無視>

送信者Aが質問をした理由に続けて、Pre-closingの機能を持つ「お礼」

を述べたので、やりとりは終結に向かっていたが、受信者Bは再び他にも補助員を頼まれた人がいる、という新しい話題を出しPre-closingを無視している。ただし、送信者Aからは返信はなく、やりとりが突然途切れる結果になっている。

例5

(送信者Aは友人2人と一緒に遊んでいる場へ受信者Bを誘っている。)

A : 来てよー (☺) これは私から (♥) ちょっとでーから (✂)

B : A~ごめん (👉👉) みんなと会ったら長居したくなっちゃうからさあ (☹)

A : Bちゃん、ちょっとでーからおいでって (!!) ■■ (注: レンタルビデオ店) の上の▲▲ (注: 飲食店) にいるから (♥)

B : みんな~ (💧) ごめんね (☹) <Pre-closing>

A : じゃー●● (注: Bが近々行く予定の場所) から帰って来たら飲もうねー (☺) <Leave-taking>

B : もちろんだよ (上矢印×2) みんなによろしくねっ (☺♥) <Leave-taking>

A : Bちゃん、二人のどちらか会いたくないでしょ (?!?) <Leave-taking無視>

B : うん… (💧) っていうのはウソよ(笑) (☹!!) 突然誘われるの苦手なだけ(笑)

A : そっか (☹) んじゃ今度から先にメールするね (♥) 確かに行きなりだとねー (💧) っていうーなかー今日もいきなり参加 (☹) 二人が死んでるよ (☹) Bちゃんに嫌われてるって (♥)

B : メールありがとね (☺♥) 3人で楽しんで~ (👉👉) <再びLeave-taking> むしろみんな大好きだし~ (☺♥)

A：ウソっぽい(笑) BY 二人。 本当にごめんなさいって (☹) 何が  
だろーねー (針) <再びLeave-taking無視>

例5では、受信者Bは謝罪でPre-closingを行い、それに対して送信者Aも未来の予定について述べるLeave-takingを行い、やりとりが終結するかに見えた。しかし、送信者AのLeave-takingに対する受信者BのLeave-takingが提示された時に送信者Aは新たな話題を出し、やりとりを続けようとしている。1ターンずつのやりとりの後、受信者Bはお礼と相手への配慮を示し再びPre-closingを行ったが、Aはまた別の話題を始めようとした。しかしBからの返信はなく、突然途切れたような終結を見せた。

## 7. まとめ

以上、携帯メールのやりとりにおける開始部と終結部の分析・考察を行った。本研究から明らかになったのは以下の3点である。

1点目は、開始部で、簡略化された相互認識が行われているものと行われないものが見られた点である。鶴田(2005)が携帯電話の会話に関して指摘している相互認識と同様に、ニックネームでの呼びかけ、フォーマルでない呼びかけ、唐突な話題の導入などがみられた。ただし、唐突な話題の導入の中で働きかけの機能を持たない「報告」から始まる例も見られた。これは携帯メールの特徴的な開始の仕方だと言える。この現象は、鶴田(2005)が提示した携帯電話の特徴、「個人性」「受け手とかけ手の特定性」「特定性に対する信頼」と、田中(2001)の「実況中継」化が携帯メールでさらに加速化していることの表れではないだろうか。

2点目は、終結部において、岡本(1992)の分類によるPre-closing、

Leave-takingともに無いメール、つまり終結部そのものが無い場合がある点である。それらはさらに、送信者が欲しかった情報が入手できた時点で突然終了するタイプと雑談が長く続いた後、突然終了するタイプの2種類に分類される。Leave-takingは、別れによってふたりの関係が損なわれる可能性を「つくろう」ための発話交換であり、その主な機能は「お互いの関係の再肯定」である。したがって、Leave-takingの無い携帯メールは互いの関係の悪化を「つくろう」行為がないと言える。このようにClosing section無しにやりとりが終了する原因は、携帯メールの特徴である拘束性のなさ（外部事情のせいにしてコミュニケーションを簡単に切断できる）と一度に送信できるメッセージの短さ、非同期であること（時間をずらしながらやりとりする断続的なコミュニケーションになる）にあると考えられる。

3点目は、終結部において、Pre-closingまたはLeave-takingが無視される場合がある点である。一方が終結に向けて進めようとしても、もう一方がそれを無視した形で新たな話題を始めようとする、無視された側は返信をしないことでやりとりを強制終了に向かわせる。電話の会話ではこのような現象は生じにくく、携帯メール特有の現象だといえる。キュー・レスの状況だからこそ生じる齟齬であり、逆にキュー・レスの状況を利用して一方的にやりとりを途絶えさせることも可能になる。双方が傷つくことを回避する「気遣いの作法」とは一見相反するようだが、強制終了させても了承される状況に対する何らかの共通理解があり、その後も人間関係が壊れることはないという保障があることが推測される。

## 8. おわりに

これまで、携帯メールはその新規性から、その文体や絵文字の使用、使用者の心理面の分析などの特性に注目が集まっていた。本研究は携帯

メールを談話の一つの在り方と捉え、やりとりの形式を分析・考察した点が有意義であると考ええる。

付記 本研究は文教大学文学部平成20年度卒業論文「携帯メールはどのようにして終わるのか」(永井千絵 未公刊)に追加、再構成したものである。データ収集にご協力くださった皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

## 引用文献

- Clark, H.H. & J.W. French (1981) Telephone goobyes, *Language in Society*, 10, 1-19.
- 林 美善 (2002) 「電話会話における終結部研究の動向—日米・日韓を比較した研究を中心に—」『言語文化と日本語教育』 236-244.
- 是永論・五十嵐素子 (2005) 「携帯メール—「親しさ」にかかわるメディア」山崎敬一 (編) 『モバイル・コミュニケーション』 第7章 大修館書店, pp119-143.
- 三宅和子 (2001) 「ポケベルからケータイ・メールへ—歴史的変遷とその必然性」『日本語学』 20(10) 6-22. 明治書院
- 三宅和子 (2005) 「携帯電話と若者の対人関係」橋本良明 (編) 『講座社会言語科学2 メディア』 ひつじ書房 pp136-155.
- モバイル総合研究所 (2005) 『災害時における携帯メディアの問題点』 (報告書代表 中村功) NTTモバイル社会研究所
- 仲島一郎・姫野桂一・吉井博明 (1999) 「移動電話の普及とその社会的意味」『情報通信学会』 第16巻 第3号(3), 79-92.
- 中村 功 (2005) 「携帯メールのコミュニケーション内容と若者の孤独

携帯メールのやりとりは、どのように始まり、どのように終わるのか

- 恐怖 橋本良明（編）『講座社会言語科学2 メディア』ひつじ書房, pp70-84.
- 岡本能里子（1990）「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72, 145-159.
- シュエグロフ・E.（2003）「電話の開始部」「補論A」「補論B」ジェームズ・E・カッツ／マーク・オクス（編）『耐え間なき更新の時代—ケータイ文化の誕生—』立川啓二（監修）富田英典（監訳）, pp370-389., pp413-417., pp418-475., NTT出版
- Schegloff, E.A.（1986）Sequencing in Conversational Openings. *Directions in Sociolinguistics; The Ethnography of Communication*, Gumperz, J.J. & Hymes, D. (Eds), pp.346-380.
- Schegloff, E. A. & Sacks, H.（1973）Opening up closings, *Semiotica*, 8, 289-327.（北澤裕・西沢仰訳1989「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学：知と会話』マルジュ社）
- 田中ゆかり（2000）「「ケータイ」という研究テーマ」『日本語学』19（12）, 18-31.
- 田中ゆかり（2001）「大学生の携帯メール・コミュニケーション」『日本語学』20（10） 32-43. 明治書院
- 鶴田幸恵（2005）「名乗りのない名乗り」山崎敬一（編）『モバイル・コミュニケーション』第4章 大修館書店, pp57-75.

#### 引用資料

- アイシェアrtypeリサーチ（2008）「今年最も利用した携帯電話の機能は」  
<http://japan.cnet.com/marketing/story/0.3800080523,20385697,00.htm>

(10.01.30検索)

au絵文字

<http://cgi.wap2.jp/emoji/ezweb/?act=find&category=1>

docomo絵文字

<http://www.nttdocomo.co.jp/service/imode/make/content/pictograph/extention/index.html>

モバイル社会研究所「ケータイ利用アンケート調査」(2008)

[http://www.moba-ken.jp/research/research2008/r08\\_01](http://www.moba-ken.jp/research/research2008/r08_01)

(10.01.30検索)

内閣府 (2007)「第5回情報化社会と青少年に関する意識調査について  
(速報)」

<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/jouhou5/g.pdf>

(10.01.25検索)

内閣府 (2007)「第5回情報化社会と青少年に関する意識調査について」

<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/jouhou5/gaiyou.pdf>

(10.01.25検索)